

抱月島村瀧太郎

先生小傳

相馬御風

抱月島村瀧太郎先生小傳
相馬御風（昌治）

【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ
（例）特種《とくだね》

[#]：入力者注 主に外字の説明、傍点の位置の指定、誤植の説明、等。
（数字は、Unicode 16進、底本のページと行数）
（例）※ [#「執/れんが」、U+24360、2-15]

／＼：二倍の踊り字（繰り返し記号）

（例）いよ／＼

／＼＼：濁点付きの二倍の踊り字
（例）それ／＼＼

【注】このテキストの文字入力エンコードは UTF-8 です。

先生、本姓は佐々山氏、明治四年正月十日島根懸那賀郡久佐村に生る。父は名を佐々山一平と云ひ、初め其の地にありて製鐵を業とせしが、後破産して商業其他諸種の業務に従事して諸所に轉住し、更に晩年に至りては家を散じて、獨り那賀郡波佐村柚根に孤住せしも、明治三十八年一月同所にて醉餘火災に罹りて焼死す。母はチセ [#「チセ」は底本では「キセ」と稱し、同懸美濃郡益田村大谷氏の出なり。嘉永二年同村に生れ、晩年病むこと殆んど十餘年にして、明治二十八年十二月同村にありて歿す。先生、二弟一妹あり。雅一、寛一及びイチ之れなり。共に健在す。

先生の出生地久佐村は濱田港を奥に入る少許の處にあり。そこにありし佐々山氏の工場に於て製造せられたる物品は馬の背に積まれて濱田港に運ばれ、港よりは自家の所有船によりて下ノ [#「ノ」は小書き] 關を経て大阪の市場に運ばるゝを常とせり。先生の幼年時代は實に斯の如き繁劇なる家業の醸す空氣のうちに過されたるなりき。而も先生の性たるや、幼にして既に寡黙沈毅、衆と喧騒を共にするを好まず、獨り靜かに書を讀み物を思ふを楽しみたりしが如し。そは先生の弟君佐々山雅一氏が先生の逝去に際し往時を追懷して語りし左の如き談片によりても、想像し得る所なり。

[#ここから改行天付き、折り返して1字下げ]

「兄は學問好きで、小學校なども一番の席を獨占してゐた。それに就いては餘談に入るが、餘り兄が成績が好いので學校中の生徒の嫉みを買つた。そして彼が卒業しようとする間際になつてか

らにひどい目に遭はされた。それは或る森に誘はれて袋叩きにされたのであつた。常から兄は斯うした嫉みから酷い目に遭はされてはゐたが、手向ひをするでもなく、なすがまゝにさしてゐた。此の時でも矢張りその通りで兄は酷い目に遭つたことなどは何一つ口外はしなかつたが、忤が袋叩きにされたと云ふことを聞き知つた父は酷く怒つてその生徒等の家へ押掛けて行つたりした。兄は矢張り一番で卒業することになつた。」

[#ここで字下げ終わり]

斯くの如く先生は優等の成績を以て小學校の業を卒へたりしが、慘ましき家運の衰頽は先生をしてそれ以上脩學の志を得しめず、却て先生をして濱田町のとある病院の藥局生としての貧しく苦しき獨立の生活に入らしめざるを得ざりき。而もその當時に於ける先生は、其の貧しき獨立生活を通じて、將來自ら醫師として世に立たん事を望みつゝありしが如しときへ云はるゝにも拘らず、間もなく其處を去つて、其の地の裁判所に給仕として勤むることゝなれるなり。之れ先生が十五六歳の頃なりとす。

かよはき自己の力により辛うじて糊口の資を得つゝも、先生は嘗て脩學の志を斷つことなく、勤めの傍毎夜とある私塾に通ひて、漢文英語數學等を修む。就中先生の最も好んで學びしは漢文と英語とにして、漢文は早くも「日本外史」「史記」「文章軌範」等に精通し、英語はリーダーの初歩より初めて濱田町にありし間に變則ながらも中學の上級程度の讀書力を得たりしと云へば、其の獨學自習の如何に※[#「執／れんが」、U+24360、2-15]心なるものなりしかをおもふに足る。當時先生と同じく濱田裁判所に在勤せる同僚中に後の東京地方裁判所検事[#「東京地方裁判所検事」はママ。本テキスト文末に者補注あり]伊勢本一郎[#「本一郎」は底本では「元一郎」]氏、後の北海道庁長官[#「北海道庁長官」は底本では「北海道長官」]俵孫一[#「孫一」は底本では「孫一郎」]氏、及び潮恒太郎[#「恒太郎」は底本では「常太郎」]、村上芳太郎[#「芳太郎」は底本では「其太郎」]の諸氏あり。而も此等の友人等は間もなく相追うて上京し、或は高等商業學校に、或は慶應義塾に、それ／＼脩學の途に就けるを見る。さらでだに向學の念夙に衆に超えたりし先生が、自己の前途に對して當時如何に激しき焦燥を感じたりしかは、蓋し想像に餘りある所なり。

時恰も先生の前途に向つて一導の光明をもたらせるものを、當時濱田裁判所の検事たりし故島村文耕となす。文耕、もと太田姓、伊豫の人、神奈川縣都筑郡都田村大字池邊に巡查奉職中同村島村タツ方へ入夫して島村姓を冒す、後検事に任じ、晩年職を辭して辯護士となり横濱市に開業、明治三十七年九月五日同處に於て五十一歳を以て病歿す。明治二十二年文耕松江市より轉じて濱田裁判所の検事たるや、はやく既に先生の非凡を認め、後援鞭撻に努むること切なり。當時先生は給仕より進んで、雇書記たり。文耕つひに先生にすゝむるに東京遊學のことを以てし、毎月五圓宛の學資を給せんことを約す。先生意を決していよ／＼明治二十三年二月上京す。即ち先生が二十歳の時なり。而して翌二十四年、先生更に島村氏の懇望を容れ、父君と合意の上、文耕の養子となり、六月十三日入籍して島村姓を冒すに至れり。之より先、島村家より再三先生を養子として貰ひ受けたき旨の交渉ありしが、先生の父君に其の意なかりしより其都度破談に終り、爲めに或時の如きは島村家より先生へ給しつゝありし學費の暫く杜絶せしこと等あり、東京にありし先生の境遇極めて困難なる時期もありしが如し。而もかゝる窮境にありし間と雖、先生は永く病床に苦しみつゝありし郷里の母君へ小遣錢などを送りたりしと云ふ一事、以て先生の美しき性情の一端を窺ふべし。

先生の東京に出づるや、初め東京物理學校、日本英學院、私立商業學校等に、英、數、理科等を學びたりしが、明治二十四年十月つひに東京專門學校文學部に入り、同二十七年七月其業を卒ふるに至れり。但し上京の當初に於て先生の目的としたりしところ、又は其後如何なる内外の經過を辿りて特に東京專門學校の文學部を選んで入學するに至りしか等の事に關しては、今日之れを知るによしなきを遺憾とす。先生早稻田の學園にあること滿三年、豫備教育に於て甚だ不完全なるものありしに拘らず、學力群を抜き、常に級の首位を占めたり。學生時代の先生は、依然寡黙沈思の風を變へず、加ふるに操守甚だ嚴格、又非常なる勉強家にして、出席なども極めて規則

正しき方なりき。當時の先生は又其風采の甚だ見すばらしき點に於て同級生間の注意を惹き、中島半次郎氏と共に「弊〔#「弊」は底本では「蔽」〕袴先生の二幅對」を以て稱せらる。之れ一面に於て當時の先生の苦學の狀を語るものなりと雖、他面に於て外形に拘泥せざりし先生其の人の性情を語る好話柄たり。在學中、先生何れの學課に於ても拔群の成績を示したりしと雖、就中先生の研究と思索とに努めしは哲學、特に美學上の問題に關してなりき。而して卒業に際し先生の提出したる「美の意識」(?)と題する論文は、時の教授坪内雄藏、大西祝の二先生をして驚嘆措く能はざらしめしと云ふ。又先生が二年級の時、上級の金子馬治、中桐確太郎、紀淑雄の三氏、同級の中島半次郎、後藤寅之助(宙外)の二氏、及び下級の朝河貫一、綱島榮一郎(故梁川)、五十嵐力の三氏等と共に哲學會と稱する團體を組織し、坪内、大西兩先生監督の下に大に自治的研究に努むるところあり。此の會今日なほ一種の親睦機關として存續す。なほ先生が卒業當時に於ける思想、抱負等の如何なるものなりしかにつきては、卒業に際して先生自ら編輯の任に當りし同窓紀念録と題する小冊子中の自記の 白、最もよく之を語る。

[#ここから2字下げ]

島村瀧太郎

明治四年一月十日、島根懸石見國那賀郡小國村に生る、氏は本佐々山。

平生愛讀する所は、陶淵明の採菊詩、歸去來辭、東坡の赤壁賦、鴨長明の方丈記、上田秋成の雨月物語、新古今の戀の部、平家物語、ゴールドスミスの荒村詩、エマルソン文集など。

希望を語らんか、身を修め家を齋へて斯生を厚くするの餘、願はくは學者として哲學特に美學の研窮を全くし、著述家として評論的日本文學史の大成を期し、以て眞理の顯揚に幾分の力を効すを得む。誠實事に處して而も偏狹ならざる點に於て孔子の如きは景慕するに堪へたり。他より思想の自由を制せらるゝことなき限りは、如何に喧擾の裡と雖ども、我が欲するに従ひて、或は靜かに思索に耽り得べく、或は周圍の些末なる事件にまで看察を馳せ得べく、意を一理に集中せしむると共に、多方に分注すること略ぼ心の儘なる自から得意とする所なり。

我が信仰の當體は未だ名くべからず。信仰なりや否やをも自から知らざれど、唯我れの心底に何ものかの存するをば疑はず。

人々、意志正確、知性英明、同情深切、三者調和して以て事々理性の示す所に従ひ行へば、天下おのづから寧し。之れわが主義なり。

我が嗜み食う所は菓子、餅、梨子、柿子、甘酒、赤飯の茶漬、其他凡て脂氣強からざるもの。我が好愛する所は、殘月、秋山、牽牛花、小兒、或る種類の夢、狗兒、詩歌、小説、音樂劇。

失 題

秋山を染むるしくれは一色の

もみちや千々の心なりけむ

[#ここで字下げ終わり]

早稻田の學園における三年間の學生々活に於て、先生が最も深大なる感化を蒙りたる人を坪内雄藏先生となす。而して此の坪内先生との間に交はれたる師弟の關係は、更に卒業後に至りて益々深く且厚きを加へぬ。之れより先き坪内氏東京専門學校に講師たる傍、雑誌『早稻田文學』を刊行して大にわが文學界思想界の啓發に努む。而して先生の學校を出づるや、先づ選ばれて之れが編輯の任に當ることゝなりぬ。當時『早稻田文學』は實にわが文學雜誌界一方の權威を以て目せられ、わが思想界乃至文藝界に貢獻するところ甚だ大なり。先生、坪内氏の下に之れが編輯に従ふ傍、東京専門學校文學科講義録講師として美學講義の執筆に努む。明治二十八年、先生神奈川縣都筑郡都田村字池邊島村瀧藏二女イチ子を迎へて家を成す。時に先生二十五、イチ子は二十一歳なり。

先生が『早稻田文學』記者として初め最も力を致したるは、『早稻田文學』獨特の記事として重要視せられし「彙報」の作製にありしが如し。そは每一ヶ月間に起りたる文壇の諸現象に關する材料を、或は新聞、雑誌等の記事により、或は訪問によりて蒐集し、更に之れを分類し、整理し、時には批判を加へて紹介するにあり。『早稻田文學』の此の獨特なる記實的批評が、當時

乃至爾後の文壇に與へたる裨益は誠に多大なるものなるが、同時にそは坪内氏指導の下に自ら此の事に従ひし人々にとりて、得易からざる研究實修の好機會なりき。之れ後年先生自ら當時を追懷して、その所謂「彙報づくり」が先生自身にとりて三年間の學校生活以上の價值ある修業なりし事を、常に後進者に向つて語りしによつても知らる。

斯の如く、先生の『早稻田文學』記者たるや、一方に於てかの「彙報」作製その他の編輯事務に従ひつゝ、他方に於て種々なる哲學上文藝上の問題に關する評論に筆を染め、引續き同誌上に發表す。當時の文壇先生によつて啓發さるゝところ甚だ多く、隨て文壇に於ける先生の地位漸く高きを占むるに至る。明治三十三年四月刊行せられたる『風雲集』（抱月、宙外、青々園三氏合著）に收められたる「西鶴論」「音樂美の價值」「伊達競阿國劇場を觀て所謂夢幻劇を論ず」「悲劇と人生觀」「氣韻生動」「變化の統一と想の化現」等の諸篇はいづれも其の折の所産なり。先生又其の頃『早稻田文學』同人等を中心とせる數氏と共に近松研究會を組織し、主として近松の戯曲を研究し、その感化を蒙ること少なからざりしが如し。明治三十年四月、先生更に後藤宙外、小杉天外、伊原青々園、水谷不倒の諸氏と文藝雜誌『新著月刊』を發行し、その創刊號に小説「しろあらし」〔#「しろあらし」は底本では「白あらし」〕を掲ぐ。之れ先生が創作を公にしたる始めとす。『新著月刊』の發行は僅に一ケ年ほどにして止みしが、その間先生は毎號同誌上に潑刺たる時評を掲げ、當時小説壇に覇を稱しつゝありし硯友社、根岸派などの先輩を目標として戦ひ、大にわが小説界に於ける新領域の開拓に努むるところありしと同時に、自らも一方に於て小説の創作に力を致し、前記「しろあらし」〔#「しろあらし」は底本では「白あらし」〕を始めとして「笹すべり」「めをと波」「白蓮華」「ながれ星」「月がさ日がさ」「夏の夢」「佛ぞろへ」等の作を引續き發表して、批評家として以外更に作家としての非凡なる才能を認めらるゝに至る。明治三十九年一月刊行せられたる『亂雲集』一卷に收められたる小説の多くはその頃の創作にかゝるものなり。而して先生の此の創作上の才能は、既に早稻田在學當時より同級生間の廻覽雜誌『友垣草紙』を通して師友間に認められつゝありしところなりと云ふ。

明治三十一年『早稻田文學』休刊し、先生は讀賣新聞社に入り、三面主任記者たり。同年九月より新たに東京專門學校文學科講師となり、一年生の爲めに美辭學、二年生の爲めに支那文學史、三年生の爲めに西洋美學史を講じ、傍ら讀賣新聞月曜附録を主宰す。明治三十二年讀賣新聞社を辭して、書肆三省堂編輯部の一員たり、専ら辭書編纂の事に従ふ。明治三十三年四月、宙外、青々園二氏と合著の『風雲集』出版、同八月三省堂を辭し、同九月より翌三十四年十二月まで早稻田中學校教員となり英語及び倫理を講ず。明治三十五年、『新美辭學』の著あり、斯學の方面に於ける空前の大著として學界の推讃を受くること甚だ大なり。此の年三月、東京專門學校海外留學生として選ばれ、英吉利及び獨逸に派せらる。先生、その送別會の席上に於て述べて曰く、「近來洋行して歸朝する者、多く何等かの土産をもたらず。曰く何、曰く何、曰く何。余若し能ふべくんば歐洲文明の背景とも名づくべきものを觀且味はひて持ち歸らんことを希ふ。」と。以て當時に於ける先生の抱負の一端を窺ふべし。

先生先づ英吉利に赴き、明治三十五年十月より翌々三十七年六月までオクスフォード大學に在りて E. de Selincourt 講師の英文學講義、同じく Examination School に於いて G. J. Stout 教授の心理學講義、同じく Ashmolean〔#「Ashmolean」は底本では「Ashenolean」〕Museum に於て P. Gardner 教授の希臘彫刻講義等を聽講す。其間、先生は一面書窓裡の人として讀書と研鑽と思索とに努むること非常なるものありしと共に、他面彼の地の演劇と美術とに深大なる興味を感じ、或は劇場に、或は美術館に、或は展覽會に出入すること繁く、わけてもそれらのうちの或るものを通して近代文化の精神に味到することいよ／＼深し。而も亦或時は純粹に倫敦人を以て組織されたる旅行隊に加はつて、かの有名なる湖畔地方に遊び、秀麗なる其の地の自然裡に立つてワーヅワース等湖畔詩人の生活と藝術とを回想し、或時は唯一人かのストラットフォード、オン、エヴン〔#「ストラットフォード、オン、エヴン」は「Stratford-upon-Avon（ストラットフォード・アポン・エイボン）」のこと〕を訪ねて沙翁その人の偉大と共に藝術そのものゝ偉大なる生命を痛感し、更に又或時は大學を中心として程遠からぬ田舎の村々をさまようて、昔ながらの風俗と淳

樸との存する其の地の人々の生活に、限りなき愛慕を寄す。斯くの如くして、先生の學殖識見が著しき進歩を得たるは勿論、先生その人の精神的生活は廓然として新らしき生彩を帯び來れるなりき。明治三十九年七月出版せられたる『滯歐文壇』一卷中に收められたる印象録の多くは、此の英吉利留學中に於ける執筆に係るものなり。而して先生が遠く祖國の文壇に寄せたる此等の印象録が、當時わが文壇に與へたる刺戟と啓發とは、實に大なるものなりき。英吉利にある事滿二年にして、明治三十七年十月更に進んで獨逸に移り、伯林大學に入りて H. Wolfflin [# 「Wolfflin」は底本では「Wolffin」] 教授の十九世紀藝術史講義、Max Dessoir [# 「Dessoir」は底本では「Desoir」] 教授の美學原論講義に出席す。伯林に於ける先生の生活も亦倫敦に於けるそれと異ならざりき。伯林は勿論、時にはミュンヘン、ウヰン等にも赴きて、其の地の造形美術、演劇、歌劇等を鑑賞し研究することは、先生の最も重なる仕事の一つなりき。かくて翌三十八年六月、先生つひに歸朝の途に就き、歸途佛蘭西に遊び、同年九月再び祖國の土を踏むことゝなれり。

先生が足掛四年の滯歐中、故國に於ては先生の養父君と實父君と相次いで他界の人となれり。就中明治三十八年一月實父君が不遇孤獨の生活裡に於て醉餘燒死したりしと云ふ凶報は、旅中の先生にとりては一層の悲痛事たりしや疑ひなし。更に先生の滯歐中、祖國空前の大事件たりし日露戦役の勃發せしこと、而してそれに關しては歐洲人の間にありて特に見聞せし事々物々も、先生にとりては豫期せざる貴き經驗たりしなるべし。

歸朝の年十月、先生東京専門學校改稱早稻田大學文學科講師として、美學、近代英文學史、歐洲近代文藝史、文學概論等を講じ、傍ら東京日々新聞の月曜文壇を主宰す。翌三十九年一月、諸氏と共に坪内博士を助けて文藝協會組織の任に當り、その機關として再興せる雑誌『早稻田文學』の主幹たり。而して其の初號に歸朝後最初の力作たる「囚はれたる文藝」と題する評論を掲げ、それによりて泰西文藝思潮の主流に關する一家の識見を示す。次ぎて「沙翁の墓に詣づるの記」 [# 「沙翁の墓に詣づるの記」は底本では「沙翁の墓に詣づる記」] を四月號に、ヴェルサイユ宮殿のロココ藝術を論じたる「ルイ王家の夢の跡」を九月號に掲げ、沈滞に傾きつゝありし當時の批評界に目ざましき波動を與ふ。同年十月東京日々新聞の月曜文壇を退く。翌四十年九月、早稻田大學英文學科教務主任に、更に翌四十一年より同大學維持員に就任す。當時居を牛込區藥王寺前町二十番地に占む。その家の庭墓地に接するところより、時に自ら對墓庵と號す。

明治四十年より二三年間は、わが文壇空前の大波動とも稱すべき自然主義運動の旺盛を極めたる時期なりき。歸朝後日なほ淺くして夙く既に此の運動の勃興の氣運の我が文藝界に閃めきつゝあるを觀取したる先生は、勢ひ新たに於て之れが促進と誘導とに力を致すに至りぬ。而も先生が此の運動に於ける大いなる役割は、その當初にありては決して單なる猪進的唱導者のそれにあらずして、寧ろ最も聰明なる、而して最も有力なる説明者、指導者のそれなりき。即ち我が文藝界に於ける其の新しき思潮と努力とに對する深き理解と同情とに基き、之れを歐洲文藝界に於ける主潮に結び付け、以て其の意義と價值とを明らかにせんとなすことが、先生の事業の眼目たりしなり。之れ明治四十一年一月號の『早稻田文學』に掲げたる「文藝上の自然主義」を始めとして、同年九月同じ誌上に現れたる「藝術と實生活との間に横はる一線」に至る間の先生の多くの評論を味讀する者の、何人も認むるところなるべし。而も明治四十二年六月、歸朝後に成れる各種の評論を集めて一卷となし、之れを『近代文藝之研究』 [# 「『近代文藝之研究』」は底本では「『近代文藝の研究』」] と題して出版するに際し、先生は此の書を以て自然主義論を中心とし、最も複雑曲折を極めたる自家の藝術論に一段落をつけんと欲するものなることを自白し、更に新たに卷頭に添ふるに「序に代へて人生觀上の自然主義を論ず」 [# 「序に代へて人生觀上の自然主義を論ず」は底本では「序に代へて人生觀上の自然主義論を論ず」] の一篇を以てし、人生に對する自己の懷疑的心狀を 白し、懷疑哲學とも稱すべき一種の思想傾向の閃きを示したり。

此の年二月、かねて組織せられたる文藝協會新たに演劇研究科を設置するに當り、之れが指導教師となる。而して之れを動機として先生の演劇に對する興味頓に激増し、爾來専ら力を此の方面に致すに至る。隨て其の頃より文筆の人としての先生の努力の文壇に示さるゝもの漸く其の量

を減じ、剩へそれらの多くに於て先生自らの懷疑的主觀の陰影時を追うて彌々濃きを見る。同年六月、雑誌『太陽』新進廿五名大家の投票を發表するや、先生は文藝界泰斗の第四位に當選し、金製頌徳盃を受く。なほ此の年、或は仙臺第二高等學校に、或は名古屋に於ける早稻田大學校友會に、或は東京に於ける近松祭に、或は東亞協會講演會に、その他市内及び各地に於て催されたる諸種の講演會に講師として聘せらるること甚だ多し。

明治四十三年一月、『早稻田文學』にイブセン劇「人形の家」の翻譯を掲ぐ。之れより前、此の翻譯執筆中肋膜炎に冒され、翻譯完了と同時に床に就く。病やゝ癒え、二月相州小田原に轉地して療養につとむ。初夏全癒、歸京す、翌四十四年五月、文部省文藝調査會を設くるに當り、先生又選ばれて同委員に任ぜらる。同年九月、郊外戸塚村諏訪の新居に移る。此の年、「清盛」「運命の丘」等戯曲の創作に努む。又此の年、「人形の家」を文藝協會試演場に實演するに際し、先生その舞臺監督として大に努め、多大の反響あり。同九月、更に之れを東京帝國劇場に於ける文藝協會公演に上場、劇壇爲めに動く。演劇に對する先生の興味愈々熾烈にして、漸く他を顧みざるの風あり。翌四十五年五月、ズーダーマンの戯曲「故郷」を翻譯し、之れを東京有樂座に於ける文藝協會公演に上す。是に於て、演劇に對する先生の好尚殆んど其の極度に達せんとする傾ありしと同時に、先生その人の懷疑的苦悶的心狀も亦殆んど其の極に達せんとするの觀あり。十一月、飄然として奈良及び京都地方の旅に出づ。翌大正二年五月、つひに文藝協會幹事を辭す。此の年、新たにメーテルリンク劇に興味を感じ、「ペレアスとメリサンド」「モンナ・ワンナ」等の翻譯を公にす。同年九月、女優松井須磨子（本名小林正子〔#「正子」は底本では「政子」〕）等と共に藝術座と稱する演劇團體を組織し、東京有樂座に其の第一回公演を催し、「モンナ・ワンナ」を上演し、十月藝術座一行を率ゐて大阪及び神戸を巡演す。藝術家として及び人としての兩方面より、先生の行動に關する世間の論評之れより盛んなり。同年十一月、早稻田大學英文學科教務主任及教授を辭し、改めて講師となる。それより後、先生の生活の殆んど全部は、藝術座によつてなされる〔#「ゝ」は底本では「る」〕演劇事業の爲めに捧げらる。大正四年八月、東京牛込區横寺町に藝術座所屬の藝術俱樂部を新築し、同時に家庭を離れて獨り居をその内に移す。かくて藝術座創設以來歳を経ること六年、其の上演せる脚本は「モンナ・ワンナ」「内部」「サロメ」「海の夫人」「熊」「復活」等を初めとして凡そ四十種、東京に於ける公試演の外に一回乃至數回に及びて巡演せる場所は、遠くは浦鹽斯德、臺灣、滿洲、朝鮮、北海道に至るまで殆んど日本全土に遍ねく、その數二百ヶ所に近し。而して斯くの如き藝術座の世間的活動は、即ち先生その人の活動なりき。四十歳に至るまで専ら靜かなる書窓裡の人たりし先生と、此の數年間に於ける世間的活動の人としての先生とを較べ觀る時、何人かその間の甚だしき相違に驚かざらん。而も斯くの如くして歳を重ねる事六年の久しきに及びしが、大正七年八月に至り、新たに藝術座の經營を松竹會社に委託し、別に脚本研究會を組織して先生自ら之れを統率し、從來の如き煩雜なる世間的活動を離れて純藝術的の立場よりその方面の研究に努めむことを誓ふを見るや、文壇の誰彼此の一事を以て再び書齋裡の人としての先生の生活の復活を豫想し、新たなる眼を以て其の將來を期待するもの少なからず。即ち最近數年間に於ける實際社會との交渉によりて得たる先生の經驗の豊富と觀察力の鋭敏とを思ふ者は、何人も先生が這般の境遇の變化を以て、正しく先生の生涯に一時期を劃するに至らん事を期したるなりき。

然るに、同年十月下旬、明治座十一月興行の「綠の朝」の稽古を指導しつつありし間に、圖らずも悪性なる流行感冒の冒すところとなり、同月三十日藝術俱樂部の私室に臥床せしが、病勢日に募り、やがて肺炎を併發し、つひに大正七年十一月五日午前二時心臟麻痺を以て孤獨裡に逝く。享年四十八。同月七日午後四時青山齋場に於て、眞言宗の式を以て盛大なる葬儀を執行し、八日午後二時雜司ヶ谷墓地に葬る。法名安祥院實相抱月居士。

先生、イチ子夫人との間に、四男三女を擧ぐ。第三男、第四男夭折し、長男震也、次男夏雄、長女ハル子、次女キミ子、三女トシ子健在す。

先生の生涯は、劃然として二期に分たる。前期は即ち四十歳に至るまでの永き年月を以て充たされ、後期は四十二三歳の交より最後に至るまでの數年なり。而して此の二期の區分に於て、我

等は殆んど全く相異なりたるが如き二個の先生その人を見たるなり。前期にありては、先生は一貫して實に寡黙堅忍の人なりき。抑制、柔和、冷靜の人なりき。而して此の四十年に近き先生の前期の生活は、殆んど全く靜寂なる書窓裡に於て營まれたりき。此の永き期間に於ける先生は、終始一貫して純然たる一個の學徒なりき、教師なりき、批評家なりき。觀察と分析と推理と考察との諸點に於て卓越せる頭腦と、稀有なる天與の味感、直覺、洞察の力と相俟つて、批評家としての先生をして實に渾然たる一個の風格を成さしめたりき。豊富なる趣味、廣汎なる味識、機敏犀利なる觀察、明快にして周到なる批判、いづれに於ても先生は眞に批評家として優秀非凡なる資格を具備したるを稱せられたりき。就中、批評家としての先生の存在をして一世に高からしめたる所以のものは、其の温き同情の伴ひたる深き洞察の力と、聰明なる理知によりて整頓され琢磨されたる其の美しき表現の力となりき。「對境に向つて豊かなる同情を注ぎながら同時に其の眞相精髓中心意義を攫取し、之れを情理兼備の味はひある言葉に表現する」——之れ實に先生が天より稟け得たる無類の資質技倆たりとせられたりき。此の秀でたる資質と技倆とを以て、先生は批評家として立ち、教師として立てり。而して批評家として又教師としての先生が、常に自己の直感的鑑賞を聰明なる理知の力を以て整理して表現することを之れ努めたるが如く、人としての先生も亦常に自己の情意を理性の力を以て統御することを怠らざりき。東京専門學校卒業に際して其の同窓紀念録〔#「同窓紀念録」は底本では「同窓記念録」〕に自記して「身を修め家を齊へて斯生を厚くするの餘、願はくは學者として」大成を期せんと云ひ、「誠實事に處して而も偏狹ならざる點に於て孔子の如きは景慕するに堪へたり」と云ひしが如く、修身齊家出世之れ第一に人としての先生の目標たりしに似たり。由來身を奉ずるに極めて儉素、毫も享樂遊逸の氣なきは、先生の最も顯著なる性情なりき。加ふるに寡黙隱忍、好んで靜居獨座を求めしも、先生が生來の傾向たりしと云はる。斯くの如くして先生の生活の前期は、それが四十年の永き歲月の生活は、宛然古へのストア學徒のそれの如くなりき。而も又先生自ら夙く既にかの同窓紀念録〔#「同窓紀念録」は底本では「同窓記念録」〕に記して「我が信仰の當體は未だ名づくべからず」と云ひし如く、更に後年自ら公に宗教的信仰に對する自己の懷疑的心狀を白し、若くは或友人に向つて「余は神とか絶對とか云ふ事に關しては一種の不可知論を取る者なるが、若し強ひて自己の感じの上よりのみ云ふならば、宇宙の本體は何となく一種のグルーミーなる暗黒なるものゝ恐ろしき渦を巻きつゝあるものゝ如し、神か惡魔か、兎に角非常に物凄きものゝ如く思はる」と白せしと云はるゝが如く、先生の内部には終始一貫して一種の厭世思想が深く根ざしつゝありしが如し。斯くの如くして、先生の生活は一面に於て公人としてのブリヽアンシーを示し、私人としての均整と典雅と靜肅とを示しつゝも、他面に於て隱密のうちに底知れぬ暗陰を藏しつゝありしなりき。而もかくして歳を閲すること多年、齊家と立身との世間的欲望に向つての先生の努力の外的効果が、彌々顯著に擧げられつゝありしに反し、先生の胸奥に於ける陰影は年を追うてます／＼其の暗さを増すが如く感じられたるに似たり。而して其の所謂内部の何ものかは、つひに何等かの動機を俟つて、奔騰せずんば止まざるの急を、先生自らに向つて げつゝありしが如し。

斯くの如くして、一面種々なる運命に追ひ立てられ、他面先生自身の内的必然の歸向として、先生はつひに懷疑と苦悶とのどん〔#「どん」に傍点〕底に陥るの止むを得ざるに至りぬ。之れ先生が四十一二歳の頃の事となす。而して先生の生涯の此の短かき期間を以て假りに名づくれば、即ち之れ前期より後期への過渡期なりとすべけむ。げにや、此の陰慘の極をきはめしが如き懷疑的苦悶の時期を境界として、先生の生活は實に劃然たる新局面を展開したるなりき。之れ即ち大正二年夏以降、死に至るまでの先生の生活なりとす。家庭を離れ、書齋を捨て、講壇を去つて、驀焉に演劇界の喧噪裡に突進せし人、赤裸々に自己そのものを投げ出してあらゆる運命に向つて勇敢なる戦ひを戦はんとせし人、「鞭を浴び石に打たれて傷き、血まみれになつて」倒れんまでも活世間のたゞ中に自己の大道を開いて進まんとの覺悟を示せし人——後期即ち晩年數歳に於て我等の前に現れたる先生は、實に斯くの如き悲劇的英雄なりき。嗚呼、昨の先生を知り、更に今の先生に接せし者、誰か其の急激なる變轉に向つて一種の驚異を感じざりしものあらん。誠に

之れ身を以て書かれたる一個嚴肅なる啓示なり。血を以て描かれたる一個深刻なる藝術なり。

初七日の追悼會席上、先生の舊友の一人語つて云ふ、「男子の四十二は厄歳と云へど、そは單に肉體的の危機のみを意味するのにあらずして、同時に精神的の危険期なるが如し、余はこれ迄大なる野心を抱き、それが爲めに禁慾的、克己〔#「克己」は底本では「克己」〕的なる生涯を送り來りしが、人間の定命五十歳もやがて遠からざる今日に於て日暮道遠を思ふにつけ、これよりは一つ思ひ切りたる事をして死にたきものなり——これ先年島村君の余に語りしところなり」と。その言の何ぞ悲痛なるや。惟ふに、先生をしてつひに此の態度に出でざるを得ざらしめし所以のものは、一面に於て先生その人の獨自なる個性の力、隠れたる魂の力によるものなること論を俟たずと雖も、而も亦他面に於て先生その人の環境と運命との力によるものあらずんばあるべからず。之れ先生の生活のヒロイツクにして同時に悲劇的なる所以なり。一面より見れば先生の生涯は、實に慘ましき受難者の生涯なりき。而も同時に他面より見れば先生の生涯は、正に勇敢なる偉大なる闘士の生涯なりしなり。先生は實に、虐げられつゝも最後まで憶せず怯れず勇敢に、正直に、運命と闘ひて倒れたる勇士なりき。而も其の晩年數歳に互りて、人として又事業家として、先生その人の支拂ふべく餘儀なくせられたりし餘りに高き血税の値を思ふとき、我等はつひに何を以てか先生の靈魂を慰むべきを知らざるなり。

まことに、先生は稀有なる淋しき魂の所有者なりき。批評家としての先生が示せる如く、先生の趣味は極めて豊富なりき。文學に、繪畫に、彫刻に、建築に、演劇に、而して自然に、あらゆる方面に向つて、先生は異常なる鑑賞と審美と感味との能力を示しぬ、而も先生はつひに何物によりても酔ひ得ざる人なりき。酔ふべくあまりに明らかなる、あまりにすぐれたる理智を稟けたる人なりき。單に美に酔ひ得ざりしのみならず、先生は實に理想にも、神にも、燃え得ざりしなり。最もよく先生を識りし一人の友は云ふ、「そこに氏の無限の孤獨がある、無底の寂寞がある、勿論あらゆる哲人、あらゆる詩人は皆此孤獨と寂寞の心の秘密境に味到しない者はない、詩も哲學も要するに、此の味到の境地から産れて來ると云つてもよい、而も氏が敏感と鋭覺とを兼ね惠まれた心は、詩人と哲學者とを一身に兼ねた人でなければ到底知り得ない孤獨の天地、寂寞の深淵を窺ひ得たやうに思はれる。氏はそれに堪へ切れずして亂雑な喧噪に、又※〔#「執／れんが」、U+24360、16-8〕狂的な所謂生のオーケストラの中に身を投じたが、併しそれも或意味では徒勞であつた、詩人の孤獨と、哲人の寂寞とは、終生、心身を襲ひつゞけたのである、而もそこにやがて氏の磨すべからざる偉大さがある、氏の滅すべからざる純な個性の光がある」と。誠に然り、而して此の意味に於て、先生の生涯は謂ふところの近代生活そのものゝ一面を、最も鮮やかに、最も純に、最も暗示深く示したる一個の活藝術ならずや。

美の鑑賞に於て、非凡なる繊細の神經と、驚くべく鋭敏なる感覺との所有者たりしにも拘らず、實際生活に於ける先生の周圍は、終始一貫して色彩なく、光澤なく、實に無味乾燥たりき。衣服に於て、食物に於て、調度に於て、娛樂に於て、おそらく先生の如く無頓着なりし人は少なかるべし。酔うて己れを忘れず、遊んで自ら楽しむことなく、常に眼を自己の内面に向け、凝視省察瞬時も逸せざりしは、生涯を通じて變らざりし先生が生活の姿なりき。孤獨、寂寞、荒涼——自己に奉ぜし先生の生涯は、誠にその境致を脱するの時なかりしなり。而も自ら奉ずるに爾かく薄かりし先生は、他に對して——就中己れに親める者に對しては、常に變ることなき温情の人なりき、柔和の人なりき、深切なる人なりき。わけても師として後進に對する時、先生は常に聊かの衞びも城壁もなき彼等の友なりき。先生の師として後進を導くや、先づ温き同情を以て彼等自らの持てるものを洞察し理解し説明し批判し、而して更に彼等自らをして最も聰明に彼等自らの道を進ましめんことを要したりき。之れ先生のうちに見出されたる美點中の美點なりとす。而して先生のかの常にさびしき微笑を漂はしつゝ慧知と温情とに富める眼、低く沈めるうちに一味の底力ある聲、如何なる場合にも逼らざりし沈靜なる態度、少なけれども要を得てしかし美しく整頓されたる言葉、無造作に打ちくつろぎながらも頽れず亂れざりし舉止——此等の表現と相俟つて、先生的人格そのものゝうちには、何ものとも知れず常に接する者を魅する力の存したりし事は、生前先生に親める者の終に忘れ得ざる懐しき印象なるべし。而も斯くの如き先生その人の

印象の示すが如く、先生は人に對しても、事に對しても、亦思想に對しても、決して情※〔#「執／れんが」、U+24360、17-11〕を以て進む人にてはなかりき。時に對他的に闘士の風を示し、強く己れを固守するが如き傾を示し、事なきにあらざるも、そこにはつひに高くあがれる情※〔#「執／れんが」、U+24360、17-12〕の伴ふことなかりき。頗る強き執着の力はありき、己れを持する自尊の念は高かりき、而も激越の餘自己を忘るゝが如き情※〔#「執／れんが」、U+24360、17-13〕の熾烈はつひに先生のものにはあらざりき。かの晩年數歳に互れる先生の英雄的生活に於てすら、我等はつひにいつこにも先生が高くあがれる情※〔#「執／れんが」、U+24360、17-14〕に乗じたる勇姿を見出すこと能はず、進んで自ら闘ひを宣したるが如き壯觀を認むる能はず。寧ろ到るところに痛刻を極めたる運命の受難者としての悲壯なる先生を見しのみ。此の意味に於て、先生の偉大は實に最も強き受難者の偉大なりき、苦痛のどん〔#「どん」に傍点〕底までも味ひ盡さんとしたる「堪へ忍べる者」の偉大なりき。而も又隱忍つひに毫も傷くるの擧に出でず、獨り能く自己の運命を甘受しつゝ終りし先生の強く且いたましき生涯は、他面に於て實に美しく尊き受難者の風を示すものなり。棺を蔽うて後、先生の光輝をして却て頓にその美しさを増さしめたる所以のもの、此の先生の隠れたる徳の力蓋し少なからずとすべからずや。更に又あらゆる困難、あらゆる苦痛を一身に擔つて、決して他を怨みず、天を恨みず、人に憐れみを乞はず、世に訴ふることなく、最後に至るまでも自ら破ることなく、傷くることなく、棄つることなく、獨り深く自己内部の眞實に活きんとせし先生の男らしき堅忍と獨立自尊の精神に至つては、まことに之れ讚嘆に堪へざるところなり。先生の最後は此上もなく孤獨なりき。巷のうちに於ける先生の死は實に曠野の死の如く淋しかりき。而もかくして孤獨はつひに先生の生涯に純一曇りなき個性の光を與へぬ。

先生は又種々なる方面に於て、一種の考案者又は劃策者としての才能の凡ならざるを思はしめたりき。教育者として、雑誌經營者として、又は劇團經營者として、先生が常に聰明なる計畫者なりし事は、多くの人々の認めて以て推服したりしところなり。而も之れが實施者として直接自ら其の衝に當るべく、先生はやゝ其の資質に缺くるところありしが如し。先生自ら此の事を知りしや否やは明らかならざれども、或る一事の實行に従ひつゝある間に於てすら、先生は既に他の新らしき何事かの工夫考案に従ふ事多く、且甚だその事を好みたりしに似たり。或は早稻田大學英文學科主任として、或は『早稻田文學』經營者として、或は文藝協會の主腦の一人として、更に最後に藝術座の經營者として、種々なる方面に於て先生の示したる經營者的技倆は何人と雖多少の驚嘆を禁じ得ざるところなれども、而も先生は孜孜として一事業に終始すべく、あまりに現在に満足し能はざるの氣風ありき。極めて沈靜なるが如き先生の態度の奥には、絶えず現在に満足せずして「彼方へ彼方へ」と進まんとする欲求の甚だしきものありき。加之、何事に對しても、常に先生の規模はあまりに大なりき。狭き一方面の事業の計畫に當りても、先生は常に之れを廣汎なる文化事業の一部として考慮せずしては止み得ざりき。時代の文化に對して先生の持ちたる抱負は常にあまりに大なりしなり。若し劃策者としての先生の才能と、實施者としての先生の技倆との間に甚だしき距離ありしと云ふべくば、そは蓋し其の一點に因由せるところ多かるべし。而も終始を一貫して、先生が文學藝術を以て現代に於けるあらゆる文化事業の中に最高位を占むべきものと考へたりし一事は、あらゆる先生の活動をして自らに對し、又他に對して常に權威あらしめたる根本の覺悟として、永久に滅すべからざる先生の美點なりとす。然り、先生は常に此の覺悟を以て自らを鞭ち勵まし、他を教へ導きたりき。おそらく先生自ら生に對する苦悶のどん底に沈みたりし刹那に於てすら、此の強大なる覺悟を支杖として復び起ち上りし事、屢々なりしならん。之れ一面より考ふれば大なる矛盾なるが如くして、而も先生その人の生涯にありては不思議にも一個の權威ある事實なりしなり。

生來心臟に痼疾を有したりき、而してその故を以て先生が決して長生を得る能はざる人なる事は、十數年前既に親しき醫師の豫言せしところなりしとは坪内博士の談なり。科學的見地よりすれば、先生の一生は或はむしろ長かりしとすべけん。然りと雖も、先生にとりては時に天才の濫費とさへ見えたる劇團經營の苦慮今や漸く一段落を げ、加ふるに最近に於ける實際社會との

交渉によつて得られたる経験の豊富が先生の批評的天才を強大且鋭敏ならしめたるを思はしめ、文壇の視聽新たに此の圓熟期の先生に向つて大なる期待を寄せんとする時に當りて、不慮先生の長逝に會す。誠にこれ「一大喬木の俄に倒れ、一巨星の忽焉として地に墮ちたる刹那の光景」たらずんばならず。その憾みやまことに長く盡きざるなり。

教授として學者としての先生の貢献、文壇の人としての先生の光輝、劇界革新者としての先生の効績——それらについては我等は茲に云はず。本集に輯録したる遺著八卷、以て先生の光輝を永久に傳へん事を期す。

※入力者補註：

【1】＜當時先生と同じく濱田裁判所に在勤せる同僚中に後の東京地方裁判所検事伊勢本一郎氏、後の北海道庁長官俵孫一氏、及び潮恒太郎、村上芳太郎の諸氏あり。＞の箇所、「東京地方裁判所」に在職中だったのは「伊勢本一郎」ではなく「潮恒太郎」で、その職は「検事」ではなく「判事」。また、「伊勢本一郎」は「日本陶器株式会社の取締役支配人」。なお、「潮恒太郎」はシーメンス事件や大逆事件の予審判事として知られる。（参考文献・岩町功『評伝 島村抱月』）

【2】＜卒業に際し先生の提出したる「美の意識」（？）と題する論文＞の箇所、正しくは論文題名は「覺の性質を概論して美學の要狀に及ぶ」（のちに『早稻田文學』誌上にて「審美的意識の性質を論ず」と改題され明治29年9月号～同12月号発表、『抱月全集』第三卷にも収録）。

【3】底本中の「島村」姓は、抱月自身「島村」表記を常用していたが、戸籍上の表記は「嶋村」姓。また「イチ子」「ハル子」「キミ子」「トシ子」の女性名につく「子」は、戸籍上はすべて「子」はつかない。（参考文献・岩町功『評伝 島村抱月』）

島村抱月先生の七週忌に —跋にかへて—
相馬御風

[# 8字下げ] ○

月日のたつのは速いやうで遅く、遅いやうで速い。島村先生が亡くなられてから今年はまだもう七年目だといふ。しかし、私にはそれが何だか遠い／＼昔のことのやうな気がする。さうかと思ふと何だかそれはついこの間のことであつたやうな氣もする。

あの日私は要事があつて高田市へ出かけてゐた。そしてその地の或新聞社にゐた友人を訪ねて話してゐたところへ、宅の方から今島村先生が亡くなられたといふ電報が届いたがどうするかといふ電話がかゝつて來た。その電話を聞いた時の私の驚きは云ふまでもなく非常なものであつた。私は自分の町へ歸らずにすぐにも上京しようかと思つた。しかし、それには何の支度もして來てゐなかつたので、やむを得ず一旦歸宅して出なほすことにした。

ところが、その新聞社へはまだその事に關する通信がどこからも來てゐなかつた。隨て私の家から私への其の電話は新聞社の人達には天來ともいつていゝほどの「特種《とくだね》」であつた。私の悲痛な思ひに引きかへて、彼等は手を打たんばかりによろこんだ。私に對しては流石に悲しさうな言葉を口にしては居たものゝ、彼等の内心のよろこびは私にも明かに讀むことが出來た。

島村抱月といふ固有名詞があつた當時の所謂世間からどんな風に迎へられてゐたかといふことを追懐することは、現在の私にとりてもあまり悲しくいたましい。

[# 8字下げ] ○

華やかな粧ひをしたかなり多くの女の人達をまじへたにぎやかな通夜の人達の間を通つて行つて、あの藝術座の舞臺の上に置かれた先生の棺前に跪座した時の記憶も、今懷想して見ると何だか遠い／＼昔のことのやうにも、亦つひこの間のことのやうにもおもはれる。

[# ここから2字下げ]

おもふこと多きに過ぎて御柩にむかへどわれはおもふことなし
通夜の人のにぎはふ中にまじらひて我はも何をおもふとすらむ
此のわれの夢見ごゝちのさめはてゝまことに泣くはいつにかもあらむ

[# ここで字下げ終わり]

まつたくあの折の三日間の滞京は、私にはたゞ／＼夢心地であつた。何が何だかさつぱりわからなかつた。弔辭を讀めといはれても何一つも書くべき文字、云ふべき言葉をわきまへなかつた。私はたゞもう一刻も早く田舎の自分の家に戻りたかつた。そして獨になつておもふさま悲しみ、おもふさま考へたい——さうした一念のみが私の心を衝き動かしてゐた。

ああ、あれからもう七年になる。それをおもふと時のたつのが速いやうで遅く、遅いやうで速いものだといふやうなことが、今更のやうにしみじみと感じられもするのである。

[# 8字下げ] ○

今日まで島村先生が存命であつたらどうだつたらう。その後の文壇や劇壇の實狀については私はあまり詳しいことは知らないけれども、若し島村先生にしてあのまゝの活動をつゞけてゐられたら、おそらく今頃は物質的にも世間的にも一種の成金的な境界に居られることが出來たらうといふやうな事を、私は時として自ら想像もし、また人と話したりするのである。

そして、更に「さてさうなつたとしたらどうだつたらう」と考へて見て、甚だ自分に執し過ぎてゐるやうであるが、何だかそんな風な先生を見ずに終つたことが、私などには却て何となくあり難いことのやうにさへ思はれたりするのである。そこで「結局、島村抱月といふ人は一個のさ

びしい先驅者であつた——それでいゝ、それでいゝ」かう最後に私の心に囁くのである。

〔# 8字下げ〕○

島村先生は山茶花が妙に好きであつた。總じて自然の風物に對して不思議なほど心を寄せることの少なかつたのは、先生の一つの著しい性格の一面であつたやうに思ふが、さうした先生がああな山茶花のやうな淋しい灌木の花を愛してゐられたといふことは、更に一層不思議な事實である。

そんな事で先生のお墓の周圍に山茶花を澤山寄進しようぢやないかといふ企てが先年行はれたやうであるから、多分今頃はお墓の周圍にはその淋しい風情を持つた灌木が茂り合つてゐることであらう。そして毎年荒涼たる冬枯の中にあつてその木のみがああ淋しい花を咲かせつ散らしつしてゐることであらう。

それにしても、私はまだ其の先生のお墓に一度も詣でずにある。いつになつたらその機會を得ることか、それすらまだ豫想する事が出來ない。或は生涯その機會なしに終るかも知れない。しかし、此の七年間毎月の命日に、私は先生の戒名を口にし、一抹の香を焚くことだけは怠らなかつた。これが私としてのせめてもの心やりである。

〔# 8字下げ〕○

私は今島村先生が自然の風物に心を寄せることの少なかつた人だつたと書いた。これは親しく生前の先生に接してゐた當時から私の時々氣のついたことであつたが、私自身かうして田舎に住んでとりわけ自然の風物に親しむやうになつてから、一層明らかになつた事實であつた。

私達は先生の口から自然の美について、又は自然の風物の情趣についての言葉を聞いたことは、あまりに少なかつた。先生の書かれた文章の中からも、私達はその方面のすぐれた文字を見出すことがあまりに少い。先生の心は、先生の眼は、いつも人間に向つて、自己に向つて、人間と人間との生活相に向つて注がれてゐた。そこに先生の孤獨の一層悲痛な所以があり、そこに先生の淋しさの一層深刻な所以があつたやうにも思はれる。

先生はぼんやりとして自然の美に見とれるなどいふことの出來ない人であつた。自然の美に對してばかりでなく、總じて何ものに對してもぼんやりしてゐるなどいふことの出來ない人であつた。私達はあまりにしばしば何をするといふでもなく、又何を考へてゐるといふでもなく、ぼんやりしてゐるやうな先生の姿を見た。しかし、それは決して文字通りのぼんやり〔# 「ぼんやり」に傍点〕ではなかつた。むしろそれは先生の内部の働きのあまりに紛糾した忙しさからの結果であつた。先生はどこ／＼までもぼんやり〔# 「ぼんやり」に傍点〕と何かに見惚れるとか、有頂天になつて何かを歡ぶとか、さういつた時間を持ち得ない人であつた。

さま／＼の要事などにかけて、先生はひどく忘れっぽい人であつた。早稻田大學へ講義に出るのにネクタイをするのを忘れて行き、學校に着いてから誰かに注意されて始めて氣付いてあはてて附近の洋品店で間に合せの品を買つて其場をすませたなどいふやうな逸話も先生にはチヨイチヨイあつた。しかし、さうした事も決して謂ふところのぼんやり〔# 「ぼんやり」に傍点〕からの結果ではなかつた。

〔# 8字下げ〕○

先生はどんな形式のものも書かれた。たゞ先生の生涯を通じて書かれなかつたものは詩と歌とだけであつた。なるほど最後の大轉機當時に先生の書かれた短歌は少しはあるが、あれとて歌を詠まうとして書かれたものではなかつた。

その事を思ふと先生に對して私は一層さびしい氣持が増すやうな氣がする。

〔# 8字下げ〕○

先生はあらゆる方面にあらはれる美に對して、驚くべく敏感な人であつた。先生の美意識はあらゆる方向に向つて敏活に働いた。繪畫、彫刻、建築、工藝美術、人の容貌や裝身、何一つとして先生の批判を洩れるものはなかつた。先生が最後に演劇に於て自己の唯一の進路を求められたのも、要するに先生のその素質から來てゐることは疑ふべくもない。

ところが、そのやうにどの方面の美に對してもすぐれた眼識を持つてゐられたにも拘らず、先

生は何一つ道樂といふものを持たれなかつた。先生の身邊には寸毫も道樂の匂ひといふものがなかつた。着物にも、食物にも、器物にも、室内装飾にも、私達は常にあまりにその味無さに驚かされてゐたほどであつた。机上に挿された一輪の花を樂しげに眺めてゐられる先生をすら私達は見ることは出来なかつた。

さうした先生の面影を思ひ浮べて見ると、私は今でもたまらないさびしさにうたれる。あの稀なチャーミング、パワーを持つた先生その人の面影を、さうしたさびしい背景の前に置いて思ひ浮べなければならぬことは、何といふ悲痛なことであらう。

かういふ點で私が過去に於て出遇つた偉大な人々のうちに、それとよく似た印象を残してる人は長谷川二葉亭たゞ一人あるのみである。二葉亭も多方面の趣味をよく解した人であつた。しかし、その日常の身邊は此上なく落莫たるものであつた。そして此の二人の偉大な淋しい人の死も、いづれも更に一層さびしいものであつた。

[# 8字下げ] ○

ああ、もうあれから七年になるのか。おもひ出せばおもひでの種は果てしもなくある。しかし、結局は沈黙のうちにこそ凡てが收められる。先生のお墓の周圍の山茶花も此年頃もう黙つて花を咲かせたり散らせたりしてゐることであらう。(終)

奥付

●抱月島村瀧太郎先生小傳 | 相馬御風

底本：国立国会図書館・近代デジタルライブラリー

『抱月全集 第一巻』天佑社

1919（大正八）年6月28日発行

URL：<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/959971>

●島村抱月先生の七週忌に ―跋にかへて― | 相馬御風

底本：国立国会図書館・近代デジタルライブラリー

『明治大正随筆選集14 抱月随筆集』人文会出版部

1925（大正十四）年4月10日発行

URL：<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1017158>

入力者：げるぞる

2014年11月30日公開

※このテキストデータのエンコードは UTF-8 です。

※このテキストデータには入力ミス可能性があります。

※このテキストデータの複製・修正・加工・配布等の利用は自由です。

●追記：

なお、このテキストデータを縦書き表記の PDF ファイル(7.7MB)として下記 URL にアップしてあります。ご入用のかたはご自由にご利用ください。

<http://bit.ly/1BcnqX6>

抱月島村瀧太郎先生小傳 | 相馬御風

<http://p.booklog.jp/book/91815>

入力者：げるぞる

入力者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gelbesorte/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91815>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91815>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ